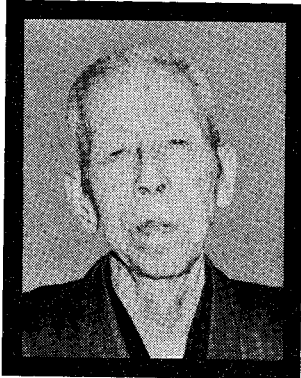


故 名 誉 会 員 永 井 専 三 氏 を し の ぶ



今年に入って永井専三博士が永眠された。

あたかも年の始め混雑の折であったから、各方面への通知も十分にできなかつたためか、つい知らない人が相当あったように思う。学会ではとりあえず代表者数名が葬式に列席したとのことであるが、わたしは数日を経て聞いたので遺憾ながら式に列席することはできなかつた、まことに残念に思う。

氏は明治 33 年、東京大学土木工学科、明治 37 年、京都大学大学院を卒業され、現在関西では最高先輩である。おそらく東京方面を探しても唯一の高令者ではあるまいか。氏は学校を卒業され数年間住友別子鉱業に席を置かれたが、あたかも 40 年宇治川電気会社が宇治川水流を利用するの計画を立て、その工事担任者として氏を招聘することに意を決し、懇望されて同社に入社することになった。氏は入社後ただちに発電最初の設備工事に着手し、ついにその全部を首尾よく完成されるに至ったのであるが、その工事中もっとも難関としたのは導水路としてのずい道工事であったと思う。それら諸工事の無事完成の功績により大正 12 年には同社取締役となり、昭和 9 年には欧米各国に視察出張、昭和 23 年宇治電

ビル社長、同 24 年には同社会長をされていたのである。以上の経路から日本の最高水力発電建設者の功労者として令名を称えられたのみならず、終身この方面に献身的に努力された功績をもって昭和 31 年には藍綬褒章を受賞されている。なお当土木学会においては昭和 10 年、関西支部長を勤められ、昭和 32 年には本会名誉会員に推されている。本年 89 才を迎えられたのであるが、このように功績顕著な立派な先輩を失なうためのは学会はいうまでもなく個人的にも誠に残念なことだと思ふ。

かえりみてわたし個人として永井氏に初めて面接したのは、氏が宇治川ずい道施行中、多分明治 42 年の夏ごろであったと思う。その当時わたしは神戸港の建設に従事し森垣亀一郎氏の配下に働いていたのであるが、ある日のこと大先輩 石黒五十二博士が来訪せられ、吉本亀三郎氏、森垣亀一郎氏に面談せられ、その席上、両氏に宇治川ずい道工事現況視察を提唱され、そして森垣亀一郎氏とわたしが同工事視察に出かけることになった。約束の日、石黒博士の先導でまず宇治川上流の入口から案内された。そのとき作業衣をつけた若年の技師がその説明の任に当てられていた。この青年はわたしと何程も年違ひもなさそうな年輩であった。ずい道は中間まだ不通、ひととおり上流部は視察を終ったので、車を下流にまわし、下手の導坑に案内された。その前後相当の長時間を費やし、すでに夕陽西に傾くころ、両氏の案内で宇治河畔料亭花屋敷に招待された。そのときはじめて名刺を交換してこの紅顔の青年がその永井専三氏であったのである。容姿端正、無口ではあるが万事深味のある態度、誰にでも好感を与える動作である。わたしはそのとき若き先輩として大きな敬意を感じたのである。刻過るにつれ互いに意気揚々、談たけなわなるころ、料亭主人の要請によって備付画帖の一角に座輿一筆を記念することになり、石黒博士はそこに自信たっぷりの感想漢詩を振り、若輩のわたしが、宇治川河畔をちなんで川辺の葦と蟹を戯らし、その一角に森垣、永井両氏が讃を添加されたのを記憶している。それはそれとしてその後数十年を経てわたしは内務省大阪土木出張所長に転じ、時おり宇治川視察にのぼり、例の花屋敷で晚餐をとることも時々あった。ある日のこと女将の説明が宇治川発電所建設の当時におよび、一時この対岸の山肌は発電工事のためまったく焼山同様と化し、座敷からの展望も見影もなく、ただ太い鉄管の列がむき出しに現われ、まことに殺伐たる風景であったが、今日ではすでに樹木生い繁り、何もかも覆い隠し、ただ青々とした深山の趣きを添え、奥ゆかしい山間の夕を味えるようになったという。そのときわたしはふと何十年前の石黒大先輩招宴のことを思い浮べ、石黒先輩詩毫のことを話したら、間もなく女中が数十冊の古い画帖を一抱え持参した。わたしはそれを年代的に開いて見たところ、正に石黒博士揮毫と小子の覚つかない川辺の葦蟹、同時に永井、森垣氏の点讀も窺われ、再びここに当時の彼氏の姿を思い浮べたことがある。

永井博士は晩年に技術に没頭するのかわら非常に深い趣味に生きた人であった。彼は吹田の一角高台に山荘を設け、そこに陶器の竈を建設し、青磁作品の研究を続け、号を千山と称えられていた。唐三彩のごときは比較的素人が真似るにも近づきやすいものであるが、青磁になると単一彩であるため、その深味を出すには非常に困難を感じる。氏の青磁作品は高麗にもよらず、淮南にもよらず、氏独得のものであった。しかしその深味を理解し得る人は氏の同輩であってもそうザラには無かつたと思ふ。

かえりみるに氏は一生を通じ、氏独得の性格に一致した特能の趣味をもって、特能の技術を養ない、自ら人生を楽しむという境地であつたと思ふ。あえて大きな名誉心も抱かれず、社会的野心にも捕われることなく、なんら憂うところもなければ傷つけられることもなくこの 89 年の長年月の寿命を果されたものと思ふ。これまったく自らを信じ天地興楽の真念によるもの、大に後輩の範となすべく、このような人間的に深みをもった先輩を失なうたのは、われわれのはなはだ遺憾とするところである。ここに思い出の一言を呈して氏の霊を慰めたいと思ふ。

(名誉会員 関西支部元支部長 高西 敬 義・記)